

『学校経営』一九五六年九月(創刊号)(第一法規)

学校経営と 学力調査

矢口 新



はしがき

学力問題は一般向けのする問題である。学力問題というと、まずピンと来るのは、テストである。テストは、端的に結果を表わす。端的に結果を表わすものは、教師にとっても、父兄にとってもわかるのである。一般に人間の通有性で、結果を問題にするが、その結果を生み出した過程を問題にしないということがある。スポーツでも、ただ勝敗が目につきやすく、記録だけを問題にし勝ちである。それと同じく、学力も、ラストの結果にだけとられ易い。がともかく、結果をはつきりと出すので、学力テストとか、学力調査を中心にして、学力問題というのは、最近多くの人々の関心をひいている。

そういうことが論じられること自体は悪くない。否、極めてよいことである。ただ問題の本質を見失わない注意が肝要であろう。次にそういう点について書いてみよう。出来るだけ具体的なことについて考えよう。

(一) 標準学力

テストをして、誰が出来るとか、誰が出来ないとか比較することは、

最も普通に行われていることである。これをもう少し組織的に考えようとしたのが、標準学力調査というのである。誰が出来る、誰が出来ないといっても、せいまい範囲では安心が出来ないから、日本中全体はどうかというように考えて、出来るだけ数多くの中に置いてみたいということである。そこで標準というようなことが考えられる。

数を多くとって、その中に置いてみたいと考えるばかりでない。テストをする問題についても同様な不安がある。特殊な問題ばかり出して、出来る出来ないということを言っているのではないか。世間一般の人の誰しも妥当だと考える問題があるのではないか。そういうテストにぶつかって、出来るか、出来ないかを検討したいと思うのである。ここからまた標準ということが考えられて来る。

所がこれではまだいけない。それは、テストによって、国語とか数学とかの学力を見たいと考えるときには、そのテストが数学の全体の学力、国語の全体の学力といったかなり総合的なものを、とらえることが出来ないかという希望がある。つまりテストによって、力をとらえようとしているのである。数学をとくときにいつも働く力をとらえようとしているのである。学力という言葉が、そういうひびきをもった言葉である。

所が学力について、こういうように問題にすることは、往々にして意味がないことが多い。それは出来るとか、出来ないとかの結果だけを問題にすることになり勝ちであるからである。標準ということ、大勢の児童生徒の中においてみるというように考えても、また標準的な問題と考えても、どちらにしても、テストの結果が何点だとか、何番だとかいうことを問題にするのでは、実際には、それだけの話である。成績がよければ安心するし、悪ければ、これはいかんということになる。悪いときはどこが悪いか、などということが問題になるかも知れない。その原因をさぐるということになるかも知れない。そんな

れば、テストをしたということは意味が出て来る。よい場合は、どうだろうか、安心してしまつて、何も問題にしないかも知れない。しかしよいというのも相対的なものである。また、全体的に点数がよいといつても、実は、一つ一つの問題ごとに見ると、よいのもあれば悪いのもある。そういう点を抜きにして、平均のごときもので、よいと安心していても、何にもならないのである。まあ気安めにはなるといった程度である。

標準の学力テストなどというものは、概念としては考えられても、実際にはむずかしいもので、現にそういうものはないといった方がよいようである。そういう名前のもになると、たとえば、小学校三年の算数の標準学力テストであれば、そのテストで三年の算数の標準の力がわかるようになっていると考えられ勝ちであるが、今考えられているペーパーテストで、そういうようには絶対に出来ないのである。つまりそれはペーパーテストの限界があるということである。ペーパーテストというのは、ただ紙に書いて解答するというだけを行うのではなく、実際に行うときには、時間もそう多くの時間をとることが出来ない。そういう限られた時間に限られた問題をやって、しかも紙に問題を出し、それに解答をするという方式で、つまり限られた方式で、一つの教科の学力というふうなものを見るということは少し冒険すぎるのである。もちろん生徒が非常に力がちがう場合はそれも可能である。すなわちたとえば小学校の三年生のものが四年生のテストをやれば出来ないことは明らかである。その程度のあらい桁で考えるのならよいということである。

一つの教科の学力というふうなことになるれば、算数であっても国語であっても相当に数多くの問題を出してテストしなくてはならぬ。これは頭で考えることは出来るが、実際にそれが成立つかというところ不可能なのである。その多くの問題を、数多くの生徒にやらせて、その結

果を整理するなどということは、実際問題として出来はしない。いつて今の所使えそうなものにすれば、せいぜい一時間位のテスト問題で、学力がわかるようにすることになればそれはもう、学力の九牛の一毛を問題にしていることになるのである。

(二) 学力の診断

九牛の一毛をみて、標準学力などと考えて、その結果をみて安心したり、不安に思ったりしていかないで、われわれのやることは、もつと別なことにあるのではないか。それは学力のテストを診断に使うということである。身体検査の結果、概評甲、乙などという評価をむかしてもらった覚えがあるが、大して役に立たなかった記憶がある。そういうことより、お前はどことどこがわるいとか、栄養の何が不足だとか、ビタミンの何が不足だとか言ってもらったら、その後の養生に役立つであろうに思った。それと同じことで、学力テストを詳しい診断に使うことが、教育としては大切なことである。算数の学力など大きく考えないで、たとえばその中の測定に関する問題についてどこをどう間違つたか、どこに考えちがいがあつたかとさぐるのである。そうすれば、子供の一人一人について、どこをどう指導してやればよいかということも明らかになる。それは教育的な仕事なのである。所で、こういうように診断することになると、子供の間違つたことは、先生の指導とも大いに関係があることがあるのである。たとえば、算数の測定の問題で、ごく単純な問題であるが、物差しの目盛りをよませる問題を出したことがある。六年生であるが、この目盛の単位が、二耗（びり）になっていることに気がつかない生徒が非常に多く、全国的にみても出来がとても悪い。単位を一耗（びり）と思いこんで読んでいるのである。これは、明らかに指導に欠陥があるのである。実際に、物差しについ

て、単位をみながら、はかるといふ指導をしていないから、こういう結果になるのである。

こう考えると、学力をみるといふが、これは、子供だけの力でなく、先生の指導の結果をみていることなのである。これまでテストをするというとき、その結果あらわれて来るものは、とにかく子供の力だというように考えてしまつて、その力をつくつた指導を問題にしないでくせがあつたのである。

もちろん、もっと大げさな言い方では指導を問題にすることもあった。たとえば、子供の学力が低いのは新教育のやり方がわるいのだなどという言い方である。学力テストは、そんなことを一挙に明らかにしようとなつた力はないのである。そうであるかないかを明らかにしようとするならば、問題を数多く出して、一つ一つの結果について、その根底にある指導の仕方を問題にし、そこから立論して来なくてはならぬのである。これまでそういう事が、積みあげられて来たかといふと、そういうものは見たことがない。要するに、学力テストによつて、診断をしたことはないのである。少くとも、それが数多く積み重ねられて来てはいないのである。

所で、診断をするといふことになる、ここに一つの問題がある。それは先にあげた測定の物差しが目盛をよむといふような問題の場合、こういう問題を出すのは、そこに指導の欠陥がありはしないかと予想をたてて問題を出しているのである。その予想を問題に出す人のそれまでの経験や、見識である。多くの授業をみて、そういう指導が行われていることを知っているから、そういう問題を出すのである。現にそういう指導に欠陥のある先生ではそういう問題は出来ないものである。

診断のために、よい聴診器を使うことが必要であるように、よい問

題をつくつて学力の診断をしなくてはならないのである。そういう意味の標準的な問題といふものをわれわれは、みんなで努力してつくり出さなくてはならぬ。それには、それぞれの地域社会のすぐれた先生が共同して、そういうものをつくるというのが最もよいであろう。一つの学校の中で、というように考えてもなかなかうまくゆかない。学校と学校の共同によつて、そういうものをつくり、自らの指導を診断するといふようになる、学力テストも本来に生かされることになるであろう。

(三)

学力を問題にするのは、学力を向上させようといふ意図があるからである。学力調査をするのは、学力が現にどれ位であるかという実態を明らかにしようとしていふからである。その実態から出発して、一歩を進めることを考えようとするからである。所でテストによつてわれわれがつかまえることの出来たのは、具体的にはこれらの問題について、こういう誤りをおかしたといふことである。だから、そういう誤りをおかさなうようにすることが学力を向上させる一歩となるのである。あくまで具体的に考えれば、そういうことにならざるを得ないではないか。そしてそこに教育的な努力があるのである。

そういう場合に、テストの結果が低いといふので、それを学力が低下しているといふように一般的な言い方をすると、われわれは誤りをおかすことになる。それは学力という言葉を使うことによつて、何か総合的な学力を考えることになるからである。言葉にごまかされるのである。そうでなくて、テストの示すものは学力の一端でしかない。全総合学力を象徴的に示すような問題などといふものはない。別な言い方をすればすべてが象徴しているとも言えるのであつて、どちらにしても意味がないのである。そこでわれわれのなし得ることは、学力

の向上のために、一つ一つ具体的な問題を出して学力の実態を調べ、その欠陥を明らかにし、それをつみあげて次第に学力を向上させて行くということ以外しかないのである。

所で、これは個人に対しても、また学級に対しても同様なことである。学力というと個人のものであるが、それを学級全体として眺めると、学習指導のどこに重点をおかなければならぬかということが一層明らかになる場合が多い。学級の多くの生徒が共通の誤りをおかしているという場合などは、明らかに指導に問題があったことを示すのである。そういう学級全体の中においてみるとまた個人個人の問題もより一層明らかになる場合がある。

所でこの場合、われわれの大切な注意は、問題に対する子供の答え方の中にあらわれた子供の考え方の特色である。そこから子供のかくかくの解答が生れ出るのである。だから大切なことは、問題に対する解答をどう解釈するかということである。ただ出来た、出来なかったを見るだけではないのである。解釈するには、解釈出来るような問題をつくらなくてはならぬ。ここに学力テストのむずかしい操作があるのである。つまり誤答がそれぞれどういう性質のものであるかをつかまえることが出来るように問題を出しておくことである。それは、生徒の学力を日頃から検査しておくことによる。こうして、学力テストは日頃の指導の中から生れ出るものなのである。そうしてまた、日頃の指導へかえって行くのである。

所が学力調査の結果を様々な教育条件とかみ合わせて、問題にしようという考え方がある。これは余程注意してかからないと、妙なことになる。たとえば、都市と農村というような条件で学力をみると、都市の方が一般に高く出るのが在来の例である。都市の子供の方が学力は高いということになる。しかしそれが現場の先生方にとって如何なる意味をもって来るか、学力を向上させようと考えている先生にとつ

ては、それだけでは余り意味がない。農村の子供を都市に連れて行くわけには行かないから、農村の子供は永久に低い学力でがまんすべしという結論になるのだろうか。

もちろんこれは一つの考え方の例であって、ただ農村と都市とに分類してどちらの学力が高いかなどとくらべるだけでは意味がないということになるという例である。それなら農村の何が低くさせる原因か、都市の何が原因なのか、それをさぐって、われわれが計画的に意図的に左右し得るものに還元出来たならば、そこではじめて、役に立った調査といえるであろう。そういうものに還元出来なければ無意味である。単なる興味を満足させているにすぎない。そこにつまらぬ論議が横行する所以がある。こういう論議は何も農村、都市といったことに限らない。学力の低い原因を、何か教育の以外のものに求めて、責任をのがれようとすることは多いのである。また逆に、教師の責任だということに一概に言うことも問題はおなじである。どちらにしても素人論議なのである。

そんな所に学力の論議をもって行かないように、現在なしうる限りのことをして、少しでも学力を高めるためには、一つ一つ具体的な事実を発見して行くという努力がなされなければならない。そういう努力が学校の経営の中に位置づくような方針をとるのが学校経営の大きな問題だと思う。

(国立教育研究所員)